

近世中期の源氏物語享受一斑

——萩原宗固と仙源抄——

須藤圭

はじめに

日本古典文学史のなかでも、源氏物語は、ひととき異彩を放つ物語といつてよい。古くから、この物語は、多くのひとびとに読まれ、受けいれられ、至宝のようにもてはやされてきた。源氏物語が、まさしく「古典」としての地位を築いていくことも、そうした先にたどりつく結末だった。ところで、そうであるならば、源氏物語は、なぜ、これほどまで盛んに享受されつづけているのだろうか。

たとえば、平安時代中期、更級日記を書いた菅原孝標女が、源氏物語をたった一人で読みふけることができる幸せに比べれば、後の位などたいしたものではない、と語り、いつか、自分も「光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめ」(二九九頁)と願ったように、物語の登場人物にそなわる魅力が、源氏物語享受の一端を担っていた、ということができる。

たとえば、鎌倉時代前期に行われた六百番歌合において、藤原俊成が「源氏見ざる歌詠みは遺恨ノ事也。」(一八七頁)と述べたように、詠作に供するため、いうならば、和歌の素材としての価値を挙げることできる。

たとえば、江戸時代前期、木下長嘯子の没後、その和歌や文章を集めて刊行された挙白集(慶安二年(一六四九)刊)には、源氏物語の須磨巻において、須磨に退去した光源氏のもとへ頭中将が訪れたことに對し、「なべて、友どちは、かうぞあらまほしく、涙もこぼるばかり思ひたまふる。」(第二卷・二〇頁)と感動したことが述べられていて、自分じしんの身体を物語内に投影して読もうとする姿勢もあつた。

たとえば、首書源氏物語(寛文十三年(一六七三)刊)には、源氏物語の桐壺巻において、桐壺帝の桐壺更衣に對する異常な寵愛が「やうく／あめのしたにもあぢきなう、人のもてなやみぐさ」になつていたとする文章に對し、「或抄、初に女中のねたみをいひ、次に上達部、上人といひ、又、天下にもと也。世上にとやかくやといひくさにする也。」(六二頁)と注釈がつけられていて、単なる語彙考証にとどまらず、物語の文脈のなかでのことばの役割をさぐるような方法もあつた。源氏物語には、物語それじたいを楽しませてくれる豊かな内容があつた、ということがわかつてくる。

たとえば、三条西実教の説を正親町実豊が書きとどめた和歌聞書(明暦二年(一六五六)以後、寛文(一六六一)一六七三)初頃成

立」には、「源氏をよく見てよし。さまざまの趣向出来るもの也。いまだよき事、古人のよみのこしたる事、いか程も有之事也。」(七四九頁)とあり、源氏物語には、さまざまな趣向が書かれていて、書かれていないものは残っていないほどだ、とまで言わしめている。

なぜ、源氏物語が、享受されつづけているか……。このことを考えたとき、以上、述べてきたように、源氏物語の内実にかかわる理由があることは、枚挙にいとまがない。しかし、源氏物語には、そこに書かれた内実とかかわる姿勢とは違って、この物語が、梗概書や絵入本、注釈書といった、さまざまな形の享受資料をもっていたことも、その隆盛を語るうえで見過ごせないのではないか。伊井春樹の調査によれば、江戸時代に出版された版本は、おおよそ百十三点を数えることができ、注釈書二十六、梗概書二十三、絵本十三、和歌関係十、教育七、系図五、辞書三、遊戯三、評論三、などに分類されるというから、これらの享受資料の影響も小さくないはずである。

そこで、江戸時代中期、烏丸光栄、武者小路実岳、冷泉為村らに学び、塙保己一や横田袋翁などの優れた門弟を輩出した、江戸歌壇の実力者のひとり、萩原宗固を軸に、この問題を考えてみることにしたい。

一 宗固の人と学問

萩原宗固とは、いったい、どのような人物であったか。^(注4)宗固は、元禄十六年(一七〇三)に生まれ、天明四年(一七八四)に没した。名を貞辰、通称を又三郎、百花庵とも号した。没後に刊行された家

集、志野乃葉草の漢文跋(天明六年(一七八六)和文序、同年漢文跋、寛政四年(一七九二)奥書)には、「蓋、少而好学、至老不廢、其於本邦之書、国史、家乘、以至稗官小説、莫不旁閲而探究者也。」(ただし、少にして学を好み、老に至つて廢さず、その本邦の書においては、国史、家乘より、以て稗官小説に至るまで、旁閲して深究せざる者なきなり。)とあり、あらゆる書籍につうじ、博覧強記であつたと高く評価される。また、河村秀穎の楽寿筆叢・第三(安永八年(一七七九)頃、天明三年(一七八三)成立)に「自ら書写を好み、うつし置ける書籍、実に汗牛充棟といふべし。」(一八一頁)とあるほか、石野広通が編んだ霞関集(寛政十一年(一七九九)刊)に「手づから書写を好て、筆に倦ことを覚えず。老ていよ篤し。」(二二二頁)とあり、大田南畝の一話一言・巻六(安永四年(一七七五)頃、文政五年(一八二二)頃成立)にも「和歌をよくし、和学に精し、自ら抄写する所数千百巻に及べり。」(第十二巻・二三九頁)とあるように、非常に多くの書籍を写したことも知られていたらしい。

宗固が書き写した物語の一例を掲げておけば、以下のとおり。

【ア】ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵黒川文庫「おちくほ物かたり」(写本、一冊、函架番号 黒・一・H・六二二)。萩原宗固自筆本。巻末「百華翁。予、幼年の時節に、後達のよみてきかせ侍りしは、四帖の本にもあらず。又、この小おちくほにもあらず。別本とみえたり」。

【イ】大東急記念文庫蔵「堤中納言物語」(写本、二冊、函架番号 二一・一〇六・一三三六)。木村正辞旧蔵。萩原宗固自筆本。

卷末「このふみは、百花庵宗固翁の自筆疑ひあるべからず。ある書師のもとにてもとむ」。

【ウ】 中西健治先生蔵「住吉物語」（写本、一冊）。萩原宗固自筆本の転写本。卷末「右、住吉物語は、萩原宗固、古写本数本を以て考たゞされしを、永井氏とよ子みづから写しもたるを乞もとめて、文化十五季卯月のはじめ、露屋中にうつし畢ぬ。七十六齡 穂積」(図1、2 参照)。

この他にも、複数の写本の存在を掲げることができ、宗固が、物語にも関心を寄せ、盛んに書写していた様子が浮かびあがってくる。

二 文学をどう読み解くか

ところで、いずれの人物であつたにせよ、和歌や物語を読み解くうえで、ことばの意味を解説した辞書は、必須のツールといつてよい。宗固の著作を通覧していくと、さまざまな場面で、辞書を用い、和歌や物語を読み解こうとする姿を見つけることができる。

宗固の著作のひとつである一葉抄は、文化的な風習に関する覚え書きや、物語の作者に関する考証、また、和歌や物語のことばにかかわる注釈などを書きとどめた、いわゆる、雑記に分類できる。次に掲げるのは、その一葉抄に書きとどめられた一節で、古今和歌集の一首を読み解こうとしたさい、そこにあらわれる「ひつち」ということばの意味を考証した部分である。

【A1】 一葉抄

一古今集、秋下、題不知、読人不知、「かれる田におふるひつちのほにいでぬは世を今さらにあきはてぬとか」。貞云、ひつちは、刈田より又おひ出る稲をいふ。和名集云、稽 俗云、比豆知自生稲也、云々。(後略)

(五十二丁裏～五十三丁表)

【A2】 和名類聚抄(元和三年(一六一七)古活字本)

稽 唐韻云、稽 音呂。後漢書稽 讀、於路賀於比俗云、比豆知。自生稲也。

(七四〇頁)

古今和歌集の三〇八番歌の「ひつち」ということばの意味を示すため、宗固は「和名集」、すなわち、和名類聚抄を引用する。和名類聚抄は、平安時代中期に成立した辞書だが、元和三年(一六一七)の序をもつ古活字本をはじめ、近世期にも広く流布していた。宗固は、和歌を読み解くとき、和名類聚抄という辞書を活用していた、という、ごくあたりまえの事実を確認しておく。

源氏物語を読むさいは、どうだったのだろうか。次に掲げるのは、源氏物語の鈴虫巻を読み解こうとしたときの覚え書きにあたる。

【B1】 一葉抄

一源氏、鈴虫巻云、「此世にすぐれ給へるさかりをいとひはなれ給ひて、ながきよ、にたゆまじき御契を法花経にむすび給、㊦㊧㊨ふかきさまをあらはして、今の世にぎえもすぐれ、ゆたけきさきらを、いと心していひつづけたる。下略。細流抄云、弁舌也。宗祇問答抄、孟津抄、弁説也。一条禪閣和

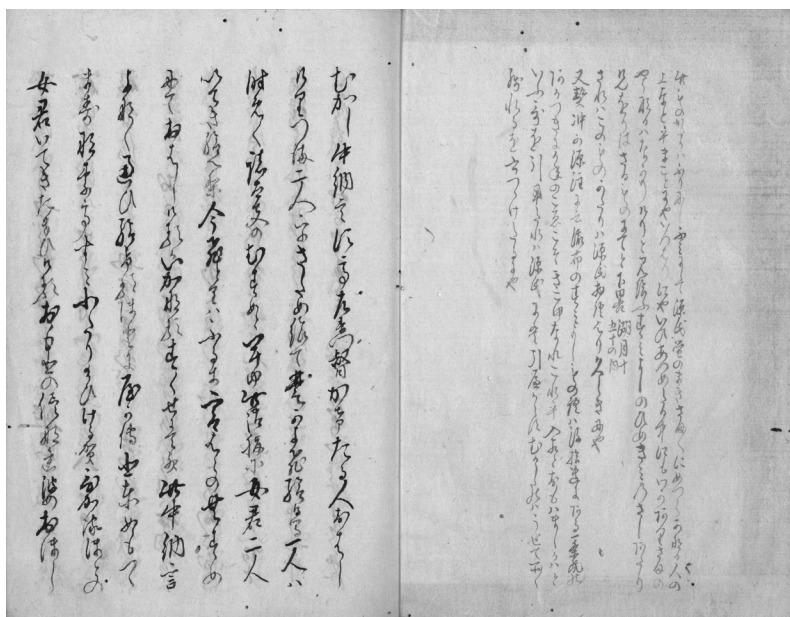


図1 中西健治先生蔵「住吉物語」(表紙見返し～1丁表)

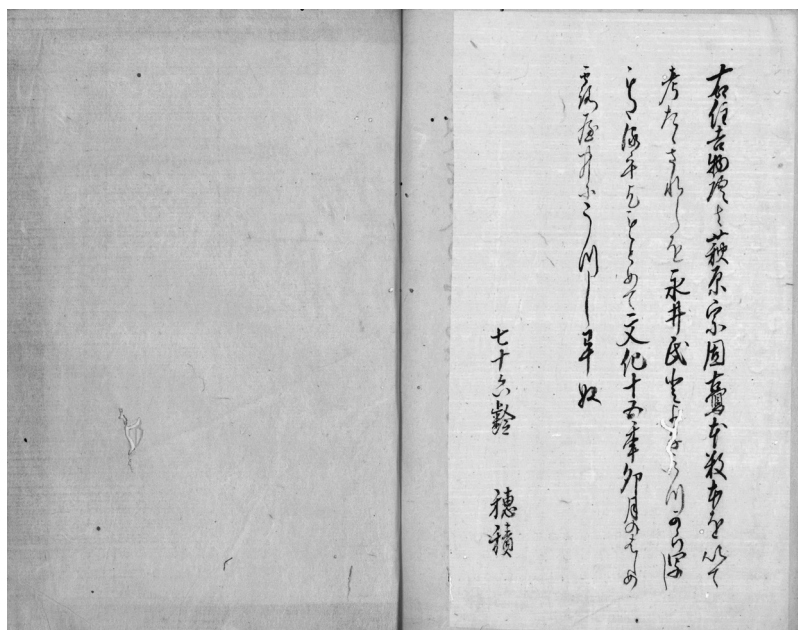


図2 中西健治先生蔵「住吉物語」(73丁裏～裏表紙見返し)

秘抄云、(中略)。兼載抄物云、(中略)。或人云、(中略)。和名抄云、説文云、啓吻。上音旬、久知比留。下音粉、久知佐岐良。くちさきらのゆたかなるとは、辨舌なるをいふなり。貞考、(後略)

(七十五丁表、七十六丁表)

【B2】和名類聚抄(元和三年(一一六七)古活字本)

啓物 説文云、啓物 上音旬、久知比留、下音粉、久知佐岐良。

(五七六頁)

出家した女三の宮の持仏の開眼供養にあたつて、その趣旨を述べていく講師の様子をあらわした「さきら」に対し、細流抄や宗祇問答抄、孟津抄など、先行する源氏注を掲げながら、ここでも、やはり、和名類聚抄(和名抄)を用いて説明していることに注意される。さて、このように、和歌や物語を読解するさいに辞書が必要だったとすれば、源氏物語注釈史のなかにも、辞書の性質をもつものがあつてよい。そして、じつさいに、その代表として掲げることができるのが、四辻善成によつて著された河海抄(貞治元年(一二三二)頃成立)である。河海抄は、源氏物語のことからについて、典拠と先例を掲げて解説するものだが、その中で、和語に対して漢字による注釈をおこなっていることが特徴として指摘できる。まさしく、ことばの意味を解説する辞書のようなスタイルになっているのである。事実、河海抄は、辞書としての使い方もなされていくことになる。

一源氏、葵巻云、「此もちぬ、かうかず／＼に所せきさまにはあらで」。河海抄云、亥の子の餅は色々也。三日夜の餅は、一色なれば、「数／＼にはあらで」と云也、云々。貞考、(後略)

(二十三丁裏)

【C2】河海抄(卷五)

此もちぬ、かうかず／＼に所せきさまにはあらで、あすのくれにまいらせよ。けふはいま／＼しき日なりけりと

亥子餅は、色々也。三日夜餅は、白一色なれば、「かず／＼にはあらで」と云也。「いま／＼しき日」とは、重日を忌也。

(二九三頁)

源氏物語の葵巻、光源氏が紫の上とはじめて逢瀬を交わした後、時節に沿つた亥の子餅ではなく、結婚成立を意味する三日夜餅をさしあげようとするくだりに対し、河海抄を用いて、説明が加えられている。この河海抄の記述は、源氏物語にあらわれる「もちぬ」の説明になつていて、辞書として、ことばの意味を説明する役割を担っている、ということができる。

【D1】一葉抄

一源氏、紅梅巻云、「なをかきあはせ給へ、とせめきこえたまへば、くるしとおぼしたる気色ながら、つまびきにいとよくあはせて、たゞすこしかきならし給。かはぶえ、ふつ、かになれたる声して」。貞考、(中略)皮笛の事、河海に委しく記給へり。

【C1】一葉抄

(二十一丁表)

【D2】河海抄（卷十六）

かはぶえ、ふつ、かになれたるこゑして

ふつ、かはふとしといふ心歎。太^{フツ}笛。皮笛^{フツ}。嘯^{フツ}也。文選、嘯賦云、動^{フツ}唇有^{フツ}曲、發^{フツ}スレハレ口^{フツ}成^{フツ}スレ音。（後略）

（五三七頁）

紅梅巻において、紅梅大納言の求めに応じ、真木柱と紅梅大納言とのあいだに生まれた大夫の君と、真木柱と故蛭兵部卿宮とのあいだの子である宮の御方が合奏するくだり。紅梅大納言は、二人の合奏に「かはぶえ」を合わせることにする。一葉抄は、ここにみえる「かはぶえ」ということばの詳細を知りたければ、河海抄を参照せよ、という。「かはぶえ」とは何か、どういった由来をもっているか、それらの詳細の一切が河海抄という辞書にゆだねられている。

源氏物語の注釈書のひとつである河海抄をとりあげ、辞書としての性質を確認してきた。もちろん、河海抄を引用する一葉抄の記述は、源氏物語のことばに対する注釈であり、だからこそ、その注釈書である河海抄が用いられているのであって、河海抄が、和名類聚抄などの辞書とまったく同じように用いられているわけではない。しかし、ことばの意味や由来を知ろうとしたとき、源氏物語そのものにとどまることなく、源氏物語から解放されて広がっていくことのできる辞書としての様態こそ、源氏物語享受の拡散を助け、また、推進していった、と考えることは許されないか。河海抄の辞書としてのスタイルが、源氏物語享受を支えた一因になっている、といっ

てよいはずだ。

三 辞書としての源氏注

宗固が関与したものとして、いっそうよく知られているものに、蜻蛉日記草稿がある^{（注1）}。蜻蛉日記草稿は、天延二年（九七四）頃に成立した蜻蛉日記の、その注釈であり、おおよそ、一〇〇〇を超える書目があらわれる。いま、この書目を一覧にして示すと、次の表のようになる。

和漢を問わず、ジャンルを問わず、実にさまざまな書目が掲げられているけれども、看過できないことは、和名類聚抄や河海抄とともに、南北朝時代、南朝の長慶天皇によって作られた、仙源抄（弘和元年（一三八二）成立）という源氏物語の注釈書があらわれている点である。

【E1】蜻蛉日記（上巻）

またまたもおこすれど、返りごとませざりければ、また、

（兼家）おほかかな音なき滝の水なれやゆくへも知らぬ瀬をぞたづぬる

これを、「いまこれより」と言ひたれば、痴^{●●●●}れたるやうなりや、かくぞある。

（九十一頁）

【E2】蜻蛉日記草稿（第一冊）

源氏は、きき巻 中将、「なにがしは、しれもの、物がたりをせん。」とて。しれもの 仙源抄二白物。

（三・一―55―3）

【E3】仙源抄

しれ物 白物 シレモノ。

(五十六頁)

道綱母が、自分からの返事がないことに痺れを切らして催促する兼家に対し、愚かしい者だ、と感じるくんだり。蜻蛉日記草稿は、「しれもの」について、源氏物語の帚木巻の一節を引用しながら、仙源抄に「白物」と注されていることを指摘する。それは、じつさいに、仙源抄にあたつてみても確認することができる。

【F1】蜻蛉日記(中巻)

あげたる簾どもうちおろして見やれば、木間より火二ともし三ともし見えたり。幼き人けいめいして出でたれば、(兼家が)車ながら立ちてある、

(二二〇頁)

【F2】蜻蛉日記草稿(第四冊)

源氏夕顔巻、あづかりいみじくけいめいしありくけしきに。注云、けいめい、うやまひしたがふ也。又云、驚たる義也。仙源抄、けいめいして、経営也。

(百三・5-224-6)

【F3】仙源抄

けいめいして 経営也。

(四十一頁)

山寺に参籠していた道綱母を追つて、兼家が牛車で来訪するくだり。蜻蛉日記草稿は、「けいめい」について、ここでも、源氏物語の

夕顔巻の一節を示したうえで、いくつかの注説を掲げつつ、仙源抄によれば「経営」のことである、という。「経営」は、忙しく対応すること。幼い子どもが道綱母と兼家とのあいだを取り次いだことを指す。

【G1】蜻蛉日記(中巻)

そのころ、小一条の左大臣の御(=藤原師尹の五十の賀のこと)とて、世にのしる。左衛門督の、御屏風のことにせらるると、えさるまじきたよりをはからひて、責めらるることあり。(中略)

(道綱母) 雲居よりこちくの声を聞くなへにさしくむばかり見ゆる月影

(一八四頁-一八五頁)

【G2】蜻蛉日記草稿(第三冊)

宗固云、師尹(公)の御賀事、栄花には見えざる歟。安和二年八月成べし。師尹(公)の男、^(注)済時などの屏風の料に、歌こひ給ふ成べし。(中略)歌は大かたよく聞えたり。追日はしく注すべし。さしくみは、仙源抄にさしより也、と有。猶説あるべし。

(六十九・3-273-3)

【G3】仙源抄

さしくみ さしより也。

(五十一頁)

師尹の五十の賀を祝うため、新たに制作する屏風に添える屏風歌

引用書目	掲載数
続後撰和歌集	2
続詞花和歌集	1
続千載和歌集	5
新古今和歌集	14
新後拾遺和歌集	2
新拾遺和歌集	1
新続古今和歌集	1
新千載和歌集	3
新勅撰和歌集	6
説苑	1
尺素往来	1
世俗浅深秘抄	2
切韻	1
説文解字	2
仙源抄	8
千載和歌集	5
千手経	1
曾我物語	1
続古事談	1
孫愔切韻	4
高光集	1
竹取物語	4
竹菌抄	1
千鳥抄	2
長恨歌	1
勅撰作者部類	3
貫之集	1
徒然草	5
唐韻	9
桃華藻葉	2
土佐日記	9
俊頼髓脳	1
中務内侍日記	1
仲文集	2
長能集	4
難後拾遺	1
日本紀私記	1
日本紀略	2
日本三代実録	2
日本書紀	6
女房私記	1
年中行事歌合	6
年中行事秘抄	1
能因歌枕	1
白氏文集	3
橋寺申牒	1
毘沙門堂記	2
百人一首抄（幽齋抄）	1
病源論	1
風雅和歌集	2
袋草紙	2
藤氏系図	2
扶桑略記	1

引用書目	掲載数
夫木和歌抄	14
法華経	1
堀河百首	2
堀河百首注（顕昭）	1
本草	4
枕草子	47
雅亮装束抄	3
真名本伊勢物語	4
万代和歌集	13
万葉集	21
源順集	3
明恵上人伝	1
無名抄	3
紫式部日記	4
明月記	2
毛詩	1
孟津抄	3
藻塩草	2
元真集	1
元輔集	1
文選	1
家持集	1
八雲御抄	14
山城名勝志	5
大和物語	27
養生秘要	1
義孝集	1
頼政集	4
礼記	2
落書露顯	1
吏部王記	2
呂氏春秋	2
類字万葉	1
類聚雜要抄	1
類聚三代格	1
弄花抄	2
和漢朗詠集	2
和名類聚抄	33
〔或書〕	1
〔伊勢物語注〕	2
〔勸物〕	1
〔系図〕	1
〔源氏物語注〕	25
〔古今和歌集注〕	1
〔拾遺和歌集注〕	1
〔徒然草注〕	1
〔土佐日記注〕	1
〔年中行事注〕	1
〔枕草子注〕	7
〔大和物語注〕	2
合計	1113

表 蜻蛉日記草稿引用書目一覧

凡例

- 一 蜻蛉日記草稿に記された「蜻蛉日記」を除く書目の名称と、それらがあらわれる掲載数を示した。
この大多数が出典注記であり、本書の基層を知ることができると考えたためである。
- 一 通行する書目の名称と異なる場合、通行のものに改めた。
- 一 単に「注」などとあるものの、前後の文章から範囲を特定できるものは〔 〕で示した。
- 一 特定の書目の引用文中にあらわれた書目、いわゆる、孫引きにあたるものも区別せずに含めた。
- 一 出典注記として掲げられた書目のなかには、誤りがあることも考えられるが、ひとまず、これを信頼した。
- 一 出典注記のない引用もあるものの、これを探索して採録することはしなかった。

引用書目	掲載数	引用書目	掲載数
赤染衛門集	3	建武年中行事	1
秋篠月清集	1	兼名苑	2
朝忠集	1	江家次第	2
敦忠集	2	孔子家語	1
和泉式部日記	3	小大君集	3
伊勢集	1	古今集顕昭註	3
伊勢大輔集	3	古今秘抄	1
伊勢物語	45	古今和歌集	89
伊勢物語闕疑抄	3	古今和歌集教長註	1
一条大納言家石名取歌合	2	古今和歌六帖	14
一代要記	1	古今著聞集	1
宇治拾遺物語	2	後拾遺和歌集	26
歌枕名寄	3	後撰和歌集	38
うつほ物語	15	小町集	2
孟蘭盆經	1	坤元儀	1
雲因抄	1	今昔物語集	2
栄花物語	33	言塵集	1
延喜式	8	西宮記	2
奥義抄	4	齋宮女御集	2
大鏡	23	催馬楽	3
大鏡裏書	1	細流抄	9
落窪物語	2	相模集	2
河海抄	15	狭衣物語	9
蜻蛉日記解環	1	定頼集	1
花鳥余情	12	実方集	1
兼輔集	2	更級日記	11
兼盛集	1	山槐記	2
歌林良材集	1	散木奇歌集	4
漢語抄	3	爾雅注	1
寛平御記	1	詞花和歌集	5
御記	1	字書	1
玉蕊	1	釈名	1
玉葉和歌集	14	拾遺愚草	1
禁秘抄	2	拾遺和歌集	44
金葉和歌集	2	拾芥抄	7
公卿補任	6	拾玉集	1
公事根源	6	袖中抄	6
愚秘抄	1	将門記	2
元亨釈書	1	小右記	2
源氏物語	150	続古今和歌集	8
源氏和秘抄	1	続後拾遺和歌集	1

を求められた道綱母が、その屏風歌を詠むくんだり。蜻蛉日記草稿は、宗固の注説であることを明示しつつ、やはり、仙源抄によって、「さしくみ」を解説している。

こうして見てきたとき、先の【E】や【F】が、蜻蛉日記から源氏物語を仲介させ、そして、源氏物語の注釈書である仙源抄を活用する形をもつ一方で、【G】においては、源氏物語を橋渡しにせず、ダイレクトに蜻蛉日記から仙源抄へと結びついていることの意味は考えられてよいだろう。それは、仙源抄が、源氏物語の桐壺巻から帚木巻、空蟬巻……と順に注をつけていくのではなく、すべての注を一括し、巻という括りを解き放ったうえで、いろは順に並べなおして記載した、まさに、辞書であつたからに他ならない。

図3は、仙源抄の一部だ。「いろは」の「い」の部分にあたつていて、「いぬき」「いかにあたる」「いがたうめ」「いかきひたぶる心」「いかめし」と、ことが並べられ、いろは順の辞書としてのスタイルをもっていることが確かめられる。すなわち、いろは順に注説を配列した仙源抄は、源氏物語の注釈書としてだけでなく、辞書のようにも用いることも可能だった、ということになる。【G】の叙述は、そうした辞書としての利用の一端と考えることができる。

【H1】蜻蛉日記（中巻）

初夜行なふとて、法師ばらそそけば、戸おし開けて念誦するほどに、時は山寺わざの、貝四つ吹くほどになりなり。

(二二九頁)

【H2】蜻蛉日記草稿（第四冊）

宗固云、（中略）山寺に四ツの時の貝ふくほどになりたるなり。

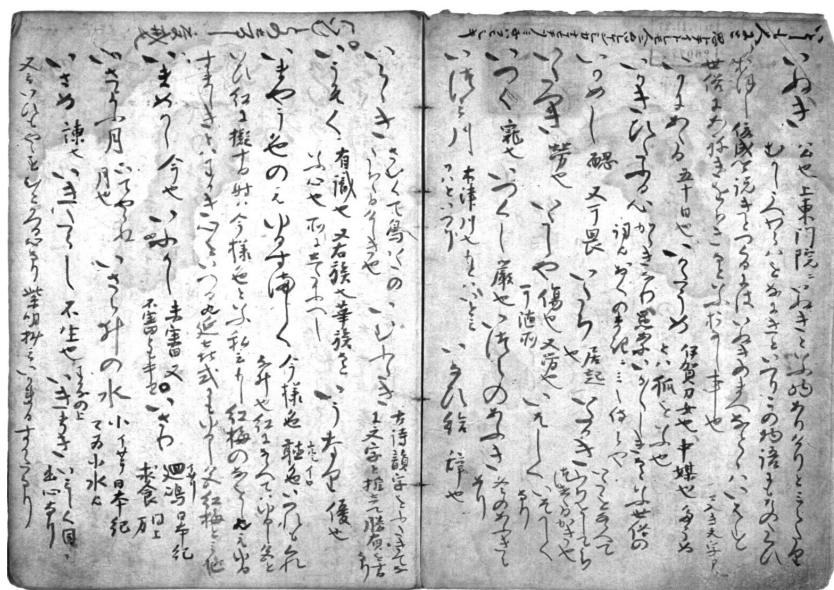


図3 京都大学附属図書館蔵中院文庫「仙源抄」（1丁裏～2丁表）

和名抄に、宝螺、千手経云、若為召^ニ呼一切諸天善神ノ者、当^ニ手宝螺一とあり。

(百三・5—224—7)

【H3】和名類聚抄(元和三年(一六一七)古活字本)

宝螺 千手経云、若為招呼一切諸天善神者、当手宝螺。

(七〇一頁)

【I1】蜻蛉日記(上巻)

海松の引干の短くおしきりたるを結び集めて、木の先に担ひかへさせて、細かりつるかたの足にも、ことの種をも削りつけて、もとのよりも大きにて返したまへり。

(二五五頁)

【I2】蜻蛉日記草稿(第二冊)

うつほ物語、(中略)。赤染衛門家集、(中略)。河海抄、ひきほし、引干、海草也。尺素往来、(後略)

(四十九・2—427—8)

【I3】河海抄(巻二十)

ひきほし 引干。海草也。

(六〇三頁)

【H】【I】には、和名類聚抄を利用する例と、河海抄を利用する例を掲げておいた。これらの利用の方法は、【G】の仙源抄の例と重なりあい、互いの共通項を浮かびあがらせている。

仙源抄は、刊本として流布することはなかった。しかし、多くのひとびとによって書き写され、利用されていた。宗固の前後に限っ

てみても、元禄五年(一六九二)書写の実践女子大学図書館蔵黒川文庫本^(註15)、享保四年(一七一九)書写の東海大学附属図書館蔵桃園文庫^(註16)本、宝暦六年(一七五六)書写の同一本^(註17)、享和元年(一八〇二)書写の彰考館文庫蔵一本などの存在が確認できる。こうした流布の状況も、仙源抄が、たんなる源氏物語の注釈書としてではなく、より広範な意義を有していた、と考えるための一助になるだろう。

四 おわりに——源氏物語享受資料の多彩な姿

宗固というひとは、ことばに対し、非常に強いこだわりをもった人物だった。宗固の古今和歌集享受をさぐった久保田啓一は「宗固の関心は『古今集』の歌語それぞれに向けられることが多く、その著述は勢い個別的にならざるを得なかった」とも述べている。蜻蛉日記草稿は、そうした宗固の個人的資質もかわっているだろうけれども、宗固以外の人物による注説も含んでいて、近世国学者の傾向として総体的に考えていかざるを得ない。しかし、蜻蛉日記草稿のなかに見られた、源氏物語の注釈書である河海抄や、仙源抄の利用の実態は、辞書というスタイルをもつこれらの注釈書に、源氏物語の読解にとどまらない有用性、そして、拡散性が内在していることを明らかにしている。

源氏物語の享受者の拡大をうながし、その普及に一役買ったものとして、梗概書、絵入本、注釈書が存在することは、これまでも執拗に言及されてきた^(註18)。全五十四帖に及ぶ長大な物語の内容を簡便に知ることが可能にした梗概書である源氏小鏡や、絵とともに物語を鑑賞することができる絵入源氏物語、先行する諸注を集めて見や

すい形で提供してみせた首書源氏物語や湖月抄は、数度にわたって出版され、広く流通し、源氏物語の読者層を拡大してきた。

そして、これらに付け加えて、源氏物語が受けいれられ、「古典」としての地位を確立していく過程に、辞書というスタイルをもつ注釈書である河海抄や、そして、何よりも、いろは順に注説を配列した仙源抄の存在があつたのではない。源氏物語の注釈書が盛んに編まれていくなかで生まれ、やがて、源氏物語という枠組みから解放してみせた辞書という形式の注釈書、就中、仙源抄の価値を重く捉えてみたいと思うのである。源氏物語が享受される歴史のなかで、その内実に見いだされてきた要素とともに、さまざまなスタイルのバリエーションに目を向けてみることに、その価値は、決して、小さいくない。

注

- (1) 松田修は、この言説を掲げながら、木下長嘯子の源氏物語に対する向きあい方が、『源氏物語』理解のために、いかなる源氏学も要請されていない。読者が原典に直接体当たりしてゆくことにより、理解を完成するいわば主体的了解方法』（『松田修著作集 第一巻』右文書院、二〇〇二年、三四二頁）であつたことを明らかにする。

- (2) 片桐洋一は、こうした姿勢をとりあげながら、「物語の展開の中にその表現を見ていく態度であつて、考証的に過ぎた古い時代の注釈書とは違って、物語を楽しんで鑑賞し、それをわかりやすく説明する態度」「物語を物語として楽しむ方法を見出そうとしている」（片桐洋一『首書源氏物語 総論・桐壺』和泉書院、一九八〇年、一三五

頁・一三九頁）などと述べている。

- (3) 伊井春樹「源氏物語古注釈書類の出版」（『武蔵野文学』四十五、一九九七年十二月）

- (4) 萩原宗固については、以下の論文に詳しい。

▽高信鎮「萩原宗固の歌業」（『学苑』八十二、一九四一年十二月）

▽安藤菊二「江戸の和學者」「萩原宗固の著作について」（『日本書誌学大系39、青裳堂書店、一九八四年）

▽安藤菊二「江戸の和學者」「楽壽筆叢——晩年の宗固と秀頼——」（『日本書誌学大系39、青裳堂書店、一九八四年）

▽大取一馬「新勅撰和歌集古注釈とその研究（上）」（『萩原宗固の勅撰集注釈——『新勅撰集秋風抄』と新出書簡等をめぐって——』

（『思文閣出版、一九八六年 ↑『国文学論叢』二十二、一九七七年三月）

▽石原昭平「大東急文庫『蜻蛉日記草稿』解説——付、歌人・萩原宗固の注釈態度と方法——」（『上村悦子先生頌寿記念論集編集委員会編』『王朝日記の新研究』笠間書院、一九九五年 ↑『大東急本』

『蜻蛉日記草稿』について——萩原宗固の注釈態度を中心に——』（『中古文学』十四、一九七四年十月）を加筆改訂したもの）

▽久保田啓一「近世堂上派の『古今集』享受——萩原宗固を中心に——」（『森正人・鈴木元編』『文学史の古今和歌集』和泉書院、二〇〇七年）

- (5) 「汗牛充棟」は「汗牛充棟」の誤りか。

- (6) 本書の本文系統を考察したものとして、土岐武治「大東急記念文庫蔵萩原宗固筆『堤中納言物語』の性格」（『かがみ』十、一九六五年三月）がある。

(7) 中西健治先生「住吉物語についての覚書」(『平安文学研究・衣笠編』六、二〇一五年三月)に詳しい。

(8) 大取一馬『勅撰和歌集古注釈とその研究(上)』(萩原宗固の勅撰集注釈——『新勅撰集秋風抄』と新出書簡等をめぐって——)(前掲注(4))によれば、現在は所在不明ながら、宗固自筆の源氏物語(帚木卷)も存在している、という。

(9) 河海抄については、以下の論文に詳しい。

▽吉森佳奈子『河海抄』の『源氏物語』(和泉書院、二〇〇三年)
▽松本大『源氏物語古注釈書の研究「河海抄」を中心とした中世源氏学の諸相』(和泉書院、二〇一八年)

(10) 宗固の河海抄利用の実態は、契沖や賀茂真淵がそうであったように(吉森佳奈子「日本紀」による注——『河海抄』と契沖・真淵——『中古文学』七十三、二〇〇四年五月)、湖月抄経由であった、とも考えられる。宗固の著作全体を検証する必要があるけれども、本稿でとりあげたものに限れば、一葉抄の「もちる」項に引用された河海抄は、湖月抄にも同文をみるが、同じく、一葉抄の「かはぶえ」項に引用された河海抄は、「河海に委しく記給へり」と提示されているにもかかわらず、湖月抄所引の河海抄は「かはぶえ」に言及していないのであって、判然としない。ただ、どちらであっても、辞書としての河海抄のスタイルが希求された結果であることに違いはない。

(11) 源氏物語注釈書にとどまらない河海抄の利用は、古辞書を通覧することによってもたしかめられる。吉森佳奈子「字書の出典となる『河海抄』」(日向一雅編『源氏物語の礎』青簡舎、二〇一二年)、同「漢字による和語の注の空間と『河海抄』」(『国語と国文学』九十一—

一、二〇一四年十一月)は、漢字によって和語を説明する『河海抄』の注説が、後代の古辞書類にも広がっていたことを指摘する。

(12) 蜻蛉日記草稿については、以下の論文に詳しい。

▽正宗敦夫「稿本『蜻蛉日記註釋』」(『文学』(岩波書店)八、一九三三年一月)

▽柿本獎「蜻蛉日記草稿」について(『かがみ』六、一九六二年八月)

▽石原昭平「大東急文庫『蜻蛉日記草稿』解説——付、歌人・萩原宗固の注釈態度と方法——」(前掲注(4))

▽金英燦「蜻蛉日記草稿」の成立についての「考察」(『語文研究』一〇五、二〇〇八年六月)

▽金英燦「大東急記念文庫本『蜻蛉日記』の注釈比較研究——『蜻蛉日記草稿』を中心に——」(『日本語文学』七十七、二〇一七年五月)

このうち、柿本獎、金英燦は、蜻蛉日記草稿を詳細に検討した結果、宗固自身によって作成されたものとは判断しない。おおよそ妥当な見解だと思う。蜻蛉日記草稿には、契沖、賀茂真淵、山岡浚明に加えて、宗固の弟子筋にあたる塙保己一、横田袋翁、屋代弘賢などの説も掲げられている。ただ、その一方で、「宗固云」「宗云」として示される宗固の注説は、相当数を見いだすことができ、蜻蛉日記草稿の中心になっている。

(13) 蜻蛉日記草稿の宗固注は、蜻蛉日記本文の「左衛門督」を藤原清時と解しているけれども、藤原頼忠と考えられる(新編日本古典文学全集、柿本獎『蜻蛉日記全注釈 上巻』(角川書店、一九六六年、三〇三頁)ほか参照)。

(14) 写本、一冊、新版目録番号 七六・旧目録番号 七三。奥書「元禄

第五歲次壬申、渡瀬氏の本をもて、公務のいとまより／＼写之、二月のはじめより、四月の末にいたりて、やうやく功を、へ侍る。落字、書あやまり、おはかるべし。松扁六窓主人」。渡邊道子「黒川文庫蔵『仙源抄』影印」(『実践女子大学文芸資料研究所年報』十四、一九九五年三月)に詳しい。

(15) 写本、一冊、請求番号 桃・九・六。奥書「右、仙源抄一卷、以道遙院殿自筆之御本、書写之畢。(中略)享保第四乙亥、弥生望和歌浦人得月散人源成書」。『桃園文庫目録 上巻』(東海大学附属図書館、一九八六年)に詳しい。

(16) 写本、一冊、請求番号 桃・九・一二。奥書「此源氏仙源抄一冊は、南朝の廷臣、花山内府源長親法名明鏡 号耕雲の述作なり。竹叢高尚蔵本を以、宝暦丙子年菊月中五筆を染畢ぬ。穂積世美書(在判)」。『桃園文庫目録 上巻』(東海大学附属図書館、一九八六年)に詳しい。伊井春樹『源氏物語注釈書・享受史事典』(東京堂出版、二〇〇一年、四二二頁)によれば、「右原本境□校蔵本 享和元年夏写」とする写本が彰考館文庫に所蔵されているという。

(17) 久保田啓一「近世堂上派の『古今集』享受——萩原宗固を中心に——」(前掲注(4))

(19) たとえば、中嶋隆「『古典復興』の諸相 江戸時代文芸の一面」(立石和弘・安藤徹編『源氏文化の時空』森話社、二〇〇五年)は、『湖月抄』の流布はもとより、版を重ねた『源氏小鏡』のような梗概書、『十帖源氏』『おさな源氏』のような絵入本等々の版本の流通は、『源氏』享受者の拡大をうながすと同時に、『源氏』にかかわる「知」の均質化をもたらした。」と述べる。

付記

本文の引用は、以下の原本・影印・文献により、巻数や丁数・頁数などを示した。引用にさいしては、私に、句読点・釣括弧等を付した。

▽更級日記 新編日本古典文学全集26『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』(小学館、一九九四年)

▽六百番歌合 新日本古典文学大系38『六百番歌合』(岩波書店、一九九八年)

▽举白集 吉田幸一編『長嘯子全集(第一巻～第六巻)』(古典文庫、一九七二年～一九七五年)

▽首書源氏物語 片桐洋一『首書源氏物語 総論・桐壺』(和泉書院、一九八〇年)

▽和歌聞書 近世和歌研究会編『近世歌学集成(上)』(明治書院、一九九七年)

▽志野乃葉草 国立国会図書館蔵本・原本(請求記号 111.108)

▽楽寿筆叢 名古屋叢書三編第十一巻『楽寿筆叢 十如是独言』(名古屋市教育局委員会、一九八五年)

▽霞関集 松野陽一『霞関集』(古典文庫、一九八二年)

▽一話一言『大田南畝全集(第十二巻～第十六巻)』(岩波書店、一九八六年～一九八八年)

▽ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵黒川文庫「おちくほ物かたり」原本(函架番号 黒・一・H・六二)

▽大東急記念文庫蔵「堤中納言物語」原本(函架番号 二一・一〇六・一三三六)

▽中西健治先生蔵「住吉物語」原本

▽一葉抄 東京大学総合図書館蔵南葵文庫本・原本（請求記号 A0037202）

による。ただし、闕字箇所に限って、國學院大學図書館蔵本・原本（請求記号 911.104/H14/1）を補って、□を○で示した。

▽和名類聚抄（元和三年（一六一七）古活字本） 京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄（本文篇）』（増訂再版、臨川書店、一九七一年）

▽河海抄 玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九六八年）

▽蜻蛉日記 新編日本古典文学全集13『土佐日記 蜻蛉日記』（小学館、一九九五年）

▽蜻蛉日記草稿 阿部篤子・荻窪昭子・後藤祥子・佐田公子「資料翻刻 大東急文庫蔵『草稿蜻蛉日記一』（萩原宗固の蜻蛉日記注）」（上村悦子先生頌寿記念論集編集委員会編『王朝日記の新研究』笠間書院、一九九五年）、後藤祥子・高橋由記「資料翻刻 大東急記念文庫蔵『草稿蜻蛉日記二・三・七』（萩原宗固の蜻蛉日記注）」（『日本女子大学紀要 文学部』四十七、一九九八年三月）、後藤祥子「資料翻刻 正宗家蔵『草稿蜻蛉日記四』（萩原宗固の蜻蛉日記注）」（『日本女子大学紀要 文学部』四十三、一九九四年三月）、後藤祥子「資料翻刻 正宗家蔵『草稿蜻蛉日記五』（萩原宗固の蜻蛉日記注）」（『日本女子大学紀要 文学部』四十四、一九九五年三月）、後藤祥子「資料翻刻 正宗家蔵『草稿蜻蛉日記六・八』（萩原宗固の蜻蛉日記注）」（『日本女子大学紀要 文学部』四十五、一九九六年三月）による。末尾には、上村悦子『蜻蛉日記解釈大成（第一巻〜第九巻）』（明治書院、一九八三年〜一九九五年）の段落・巻一頁一行を示した。

▽仙源抄 源氏物語古注集成21『仙源抄・類字源語抄・続源語類字抄』（おうふう、一九九八年）

▽京都大学附属図書館蔵中院文庫「仙源抄」 京都大学貴重資料デジタル

アーカイブ（請求記号 中院/V/30）